

序言

山折哲雄

私はかなり以前、沖繩に旅し、本島や先島の御嶽を巡って歩いたことがある。

あるときのことだ。御嶽の前で、不意に背筋がぞくぞくしはじめ、身のおきどころを失うような奇怪な衝動に襲われた。得体の知れぬ靈氣が自分のからだに働きかけてくるような圧力を感じたのである。それがはじまってから、どこかの御嶽に行ってもそれが襲ってきた。御嶽を廻りつづけているうち、私はその奇怪な衝動の襲撃に脅えていたことを覚えている。

今にして思えば私はそのとき、土地のカミの身じろぎを感じていたのである。そのまま旅をつづけていけば、やがてそれらのカミの声を聞くようになったのかもしれない。御嶽の周辺には、明らかにカミやタマの気配が感じられたのである。

そのときと前後している時期だったと思う。

沖繩を、何回目に訪れたときのことだった。那覇の、波の上宮近くの居酒屋で酒を飲んでいて、たまたま「てびち」という琉球式おでんにお目にかかって、びっく仰天したのである。ぐつぐつ煮立っている鍋の中に、骨のついた豚の肉が油をしたたらせて浮かんでいるからだ。

とにかく、おでんと豚肉の取り合せが面白くもあり、意外でもあった。そのとき私のはからずも思い出したのが、沖繩の各地でおこなわれていた茶毘豚テヒブの慣習だった。とくに老人が死んだようなとき、葬家の人々が豚を殺して会食するのだが、このとき会葬者たちはその豚の骨を食べながら、これが婆さんの骨、あれが爺さんの骨とかいって食べるのだという。泣きながら、みんなで食べるのだという。

茶毘豚というのは、茶毘テヒに付された豚ということなのだろう。茶毘テヒに付された死者の遺体と豚のイメージがそこに重ねられているに

ちがいない。それにしても、茶毘豚とはいもいったりだ。

私が沖繩の茶毘豚に関心をもったのは、本土の、とくに北九州地域に「骨噛み」という慣習があったことを念頭においていたからである。「骨噛み」は、今日では死者の出家に行つて葬式の手伝いをするのである。だが、かつては、近親者や知人が焼きあがつてきたホトケの骨を實際に噛んで、哀悼の意を表わす言葉だった。

死者の骨を噛むかわりに豚の肉を食べ、その骨を噛むようになったのが茶毘豚という慣習をみちびきだしたのではないだろうか。そういうえば、屋久島や種子島でも、葬式に行くことを「ホネカミ」に行くといっていた。それだけではない。八重山諸島でも、葬式に行くことを「ピトカンナ」（人を噛みに行く）、「ピトクンナ」（人を食いに行く）といっていた。その風習が後になって、牛馬や豚の肉を食べることに変化したのだろう。同様に宮古諸島でも、葬式に行くことが「プニズ」（骨をしゃぶる）という言葉で表現されていた。宮古の西原付近では、葬式には豚を殺して馳走することになっているが、土地の人たちはそれを冗談に「死人の骨を食べてくる」という。石垣島では、明治時代のことだが、葬式には「誰々の骨を食べに行こう」といっていた…。

これらの例を、私は酒井卯作氏の労作『琉球列島における死霊祭祀の構造』（第一書房、一九八七年）によって知ったのだが、それが日本列島にひろがる遺骨信仰とどのように関連しているのかとい

うことが、年来の私の疑問であった。茶毘と茶毘豚の觀念連合もさることながら、日本人の骨好きと骨噛みの関係も見逃せないテーマだと思つてきたのである。

話は変わる。今年（平成八年）の四月のことだが、俳優の勝新太郎が、父親の四十九日法要のさいに、その遺骨の一片を食べて関係者を驚かせたという。かれの父親は長歌三味線の大御所、杵屋勝東治で、その息子が納骨するとき、「お父ちゃんと一緒にいたい」という気持から骨を噛んだのである（報知新聞、四月八日付）。

かつて昭和維新を唱えた渥美勝（一八七七—一九二八）も、母の遺骨を墓所に葬るかわりに食べようとしたことがある。墓に葬るための費用がなかったからであるが、そのとき「母をおれのふところへ葬ろう。母はきっと喜ぶに違いない」とかれは語っている。同じころのことであるが、国家反逆罪で刑死した北一輝の遺骨を食べて、追悼の意を表わした人もいたのである（橋川文三『昭和維新試論』、朝日新聞社）。

もう一つ、つけ加えよう。九州の筑豊炭田で五十余年間も坑夫として働いた山本作兵衛氏が、閉山後に筆をとつて描いた『明治大正炭鉱絵巻』というのがある。そのなかに、坑内で死んだ坑夫の骨を同僚が噛む凄まじいシーンが出てくる。筑豊の炭鉱労働者のあいだでも、甲いに参加することを「骨噛み」と呼び慣わしていたが、右の『絵巻』では、実際に骨を噛む場面が出てくる。（山本作兵衛・

画文『築豊炭坑絵巻』、葦書房、上野英信『骨を噛む』大和書房。

歌人の太田代志朗が、若くして逝った娘さんの遺骨に深い愛着を寄せ、つぎのように歌っているのも私には忘れがたい（『清らかなる夜叉』、弥生書房）。

白骨^{はね}くだき^は食^はめばをみなのかみなびき

精霊送りの火かすみゆく

このような例を探していけば、この外にいくらでもみつかるだろう。だがそれらについてはこれまでに書いてきたこともあり、これ以上ここで挙げることは控える。

ただ、このように日本列島から琉球列島にかけてひろく分布する「ホネカミ」慣習を、全体としてどのように考えたらよいのか。そのことを、かりにさきの茶毘豚の慣習と重ね合せるとき、いったい何がみえてくるのだろうか。ひょっとして、日本人の遺骨信仰の根深さのようなものの秘密を解く鍵が、そこから見出されるかもしれない。

ここでは詳しくはふれなかつたけれども、ヤクザ社会では、組のために殺された者を追悼し、その怨をみをはらすために骨を噛んで復讐を誓うことがあるという。ごく近年においても、そういう儀式が本土でおこなわれている（共同研究「葬墓制と他界観」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第四九集、平成五年三月の拙稿「序文」）。

それはむろん、ヤクザの世界だけの問題ではなかつた。というのも、骨にまつわる慣習に関して、ヤクザ社会と民俗社会のあいだに、根本的な差が横たわっているとはまず考えられないからだ。その急所のところをどのように結び合わせて「ホネカミ」慣習の秘密を読み解いていったらよいのか。噛みくだいていったらよいのだろうか。

問題はさらに増幅し、思わぬ方面に波及してもいく。今、葬式に行くことを「人を食いに行く」という地域のあることを紹介したが、もしもそうだとすれば、その骨食いの慣習の背後に人食いの慣習の影をみとめることができるかもしれないからだ。見方にもよるが、骨食いも人食いともに死者への追悼の激しさ、哀悼の深さをあらわしているのとみることができるところだ。それとも、かつて国分直一氏が推定したように、そこにカニバリズム（人肉食）の慣習の痕跡をみとめることができるのだろうか（『環シナ海民族文化考』、慶友社、一九七六年）。だが、茶毘豚の事例を広く集めて分析しているさきの酒井卯作氏は、そのことに深く立ち入ろうとはしていない。茶毘豚の来し方行く末をどう占うか、やはりにわかには決しがたい難問なのかもしれない。

私は以前、沖縄のある海辺を歩いていて、白骨が累々と積み重ねられている光景にぶつかり、思わず立ちすくんだことを覚えている。骨と骨とがかがりもなくひしめき合い、声にならない声をその奥の方から発しているように思ったのである。骨と骨のあいだの隙間に

できる闇の穴から、死者たちの咆哮の叫びがこだまし、耳元まできこえてくるようであった。

そんな経験をしたからかもしれないが、私はたまたま島袋盛敏氏の手になる『増補・琉歌大観』（沖繩タイムス社、一九六四年）の頁を繰っていたとき、何気なく沖繩における骨の運命を考えていた。そしてそれらの琉歌のなかに、骨をうたった歌を探してみようと思ったのである。

「序」を書いている比嘉春潮氏によると「琉歌」が発生したのは、沖繩人が日本文学に接して和歌をつくるようになったことと、三味線が伝来し普及したことによるのだという。仏僧・禅鑑が沖繩に渡来したのが十三世紀中葉であるが、和歌が和文とともに書かれるようになるのがほぼそのころではなかったかという。そして十四世紀末になって、三味線が久米村人の移住とともに沖繩に伝わった。この三味線の伴奏でうたうのに、「おもろ」のような長歌よりも、定型で短くまとまった思想を表現する和歌の方が合ったのだらうと、比嘉氏はいつている。八八八六の三〇文字でまとまる琉歌の発生基盤が、そこにあつたというわけである。

その『琉歌大観』では、琉歌が『万葉集』や『古今集』の分類にならって、春・夏・秋・冬・賀の部というように整理され、さらに相聞（四六四首）、哀傷（一三五首）の別が立てられている。ここでいう「哀傷」（生別・死別の悲しみ）が『万葉集』の「挽歌」に

あたることはいうまでもない。ところがその総計一三五首をつらねる哀傷の調べのなかに、「骨」をうたったものがただの一首しかみつからなかつたのが私には意外だった。ホネカミの沖繩において、「骨」の歌が極度に乏しいことに驚かされたのである。が、それはともかくとして、ここにその一首を記しておこう。作者は上江州由恕。

たづねれば昔よしや白骨の

さらす百ぢゃなや百の哀れ

「百ぢゃな」は百按司のこと。今帰仁間切連天港の近くに、百按司墓というのがある。その墓のなかに、沢山の白骨が累々と重なっている。普通の墓は、中が見えないから白骨の累積も見えない。けれども今帰仁の百按司の墓は、外から白骨の累々と重なり合っているのが観察された。以前私が他の海岸部で見たのも、そのような墓の一つだったのだらう。こうして右に挙げた和歌の意味は、つぎのようなことになる。

——「よしやの昔の跡をたづねると、もう白骨になっているのが、今帰仁の百按司墓のさらした白骨のようになっていであろうと思われて、非常な哀れが感じられる」（同書、五〇〇頁）。

「琉歌」の哀傷の部に白骨をうたったものが一首しかみつからなかつたというのは、不思議といえは不思議な話である。あるいはそ

れはたんなる偶然の結果なのかもしれない。しかし、ひるがえって考えてみると、わが『万葉集』においては死者の遺骨を、それとしてうたったものはほとんど無いに等しいのである。それを思えば、島袋氏の編集した『琉歌大観』に「白骨」をうたったものが一首しか見あたらないというのも、別に不思議なことではないということになる。

『万葉集』に遺骨の歌があらわれないのは、古代人にとって、死者たちの靈魂の運命こそがより重大な意味をもったからなのだろう。それにくらべれば、あとに残された遺骸（そして白骨）はたんなる魂の脱け殻にすぎないものだった。おそらくそのために、白骨詠や白骨賛歌が登場しないのである。沖縄の琉歌の場合でも、おそらくそうだったのではないだろうか。けれども他方、いつごろから始まったのか沖縄においても、そして本土においても、骨にたいするつよい執着の思いが時を経るにつれて並大抵のものではなくなった。そのねじれたような変化のプロセスが、私にとって今なお謎の微光をたたえたまま興味ある論題になっているのである。

いま『琉歌大観』の哀傷（挽歌）にふれたのであるが、じつは『万葉集』の挽歌を論じて、そこに収められている相聞歌のなかにもこの挽歌からきているものがある、といったのが折口信夫であった（『折口全集』第九卷、「上代貴族生活の展開」、中央公論社）。

たとえば『万葉集』巻二の巻頭を飾る仁徳天皇の皇后、磐姫の歌。

君が行き日長くなりぬ山尋ね

迎へか行かむ待ちにか待たむ

あなたが逝ってから日が長く経った。それで山に入って迎えにこう、待とうとしてもとても私には待ちきれない、というのである。折口によれば「山尋ね」とあるのは、死んだ人の魂は奥山にいます考えられていたから、招魂のために奥山に入ろうとしているのだという。つまりこの歌は、『万葉集』では相聞歌として分類されているけれども、もともとは相聞歌ではなかった。間違いなく挽歌だったのであり、その挽歌が恋歌に変化していく過程が面白いのだといっている。

ついでにいえば、このような折口の考え方をさらに発展させ、それを沖縄の死者儀礼と結びつけて新しい解釈を示したのが谷川健一である。

氏によると、『万葉集』の挽歌では折口のいうように魂ごい（招魂）の歌が大きな地位を占めていることはたしかである。だがその他にもう一つ、突然の病いや行き倒れのような異常な死に方をした亡者にむかって、もうこの世にふたたび戻ってはくるな、と呼びかける歌があったのではないかという。

たとえば柿本人麻呂がうたったとされる挽歌には、若くして死んだり、怪我などの不慮の事故で死んだりした者を忌み嫌い、これを

怖れるというものがとくに目に着く。それを谷川は挽歌の第二類型として注目しているのであるが、そのような観念がたとえば沖繩の「キガズン」という言葉にあらわれているのだと谷川は論じている（『挽歌の発生』、『国学院雑誌』第九十四卷第二〇号、一九九三年二月）。

キガズンというのは怪我をして死ぬことで、沖繩では大変不名誉なこととされてきた。そしてこのような病死とか溺死とか、要するに事故死にあった者が出た場合、たとえば宮古などではユンナツとかユンナキ（「詠んで泣く」という意）といって、哭き女が祭文のようなものを詠んで泣くという儀礼がある。『日本書記』なんかに出てくるシノビゴト（誅詞）の儀式がそれにあたるといってよいだろう。

ただ、この沖繩における哭詞としてのユンナツとかユンナキでは、死者を悼むのが目的ではなく、むしろ死者を詰問し非難する言葉という特徴がきわ立っている。穢れた異常死にたいする禁忌の意識が浮上していることに注目しなければならない。そこに『万葉集』における第二類型としての挽歌に対応するものが認められるのだという。

まさに、挽歌の多義性である。哀傷歌の多産性といってもよい。琉球からの視点で、それらの挽歌や哀傷歌の世界に光をあて、その先にひろがる深淵にわれわれを導いてくれる。さきへのべたホネカ

ミ（骨嘔み）やダビワー（茶毘豚）の慣習も、ひょっとしてそういう深淵のなかから立ちあらわれる、目に見えない連鎖の環と結びついているのかもしれない。

この琉球からの視点に内包される連鎖の環は、むろんたんなる古代世界を探索するための道しるべなのではないであろう。それは、また今日の沖繩が抱える痛苦の体験をわれわれの眼前に写しだすキー・コンセプトでもあるにちがいない。挽歌と哀傷歌は、今なおわれわれの心を蕩かし、ときに惑乱させるうたなのである。小文の冒頭にふれたことだが、かつて沖繩の御嶽巡りをしたときの、身のおきどころを失なったようなぞくぞく体験も、あるいはそのような歴史を超えた悲傷の調べに反応したためであったのかもしれない。

最後になってしまったけれども、本報告書は、国際日本文化研究センターでおこなわれた共同研究「日本文化の深層と沖繩」の成果をまとめたものである。新鮮な問題提起と慎重な討議が淡々と重ねられ、沖繩の世界の奥行きがしだいに豊かに、そして大きくふくらんでいったことが、何よりも有難く嬉しいことだった。参加されたメンバーの方々、そして本報告書に寄稿して下さった方々には、心からの感謝を捧げたいと思う。そのささやかな気持の一端を、僭越ながらこうした「序言」の形で申しのべさせていただき、共同研究の担当者としての責めを塞ぎたいと思う。